

「教員のための博物館の日」を契機とした地域の教育資源の再構築と全国的なネットワークへの発展

碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館 地村佳純、青木 至
国立科学博物館 岩崎誠司、小川義和、土屋実穂、渡邊千秋

「教員のための博物館の日」は、学校と博物館の連携促進を目的として2008年より始めた事業である¹⁾。2013年度には日本各地の14地区で開催され、博物館を会場とすることで多彩な機関が参加し、その運営方法も多様なものとなってきた²⁾。本発表では、西三河地方（愛知県）での開催事例を紹介し成果と課題を共有するとともに、本事業を全国的なネットワークへと発展させるための方策について提案する。

「教員のための博物館の日 in へきなん」 を契機とした地域の教育資源の再構築

碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館 地村佳純、青木 至

1. 碧南海浜水族館における小学校と連携した教育普及活動

碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館は、愛知県西三河地方に位置する碧南市に昭和57年(1982年)に開館した地域密着型の地方水族館である。水族館としては、数少ない公立直営館で教育委員会所管の登録博物館として、水族の展示だけでなく希少生物の保全や教育普及活動にも力を入れている。なかでも、市内の小学校と連携した教育普及活動は開館当初より学習カリキュラムに導入されており、小学2、4、6年生の全児童(約2,000名)が毎年、生活科や理科の時間を利用して水族館に来館する。



写真1 碧南海浜水族館

博学連携について考えた際、“水族館(博物館)と学校現場との意思疎通”という課題は、全国的にも永遠の課題として必ず提起される問題である。

このハードルをクリアすべく、当館では、①博物館協議会の下部組織として各学校からの代表者で構成された“運営研究会”を設置し水族館の効果的な利用法を検討する、②水族館の教育普及部門に“現役教員”を配置する、③水族館学習を実施する学年の教員を対象にした“事前研修会の開催”や“学習の手引書”を発行する、など組織体制からソフト面まで、あらゆる策を教育委員会と共に講じて理想的な博学連携を進めてきた。

その一方で、長期にわたる連携により教員との関係や学習プログラムの固定化による“マンネリ感”は、今後も連携を継続していくうえで大きなストレスとなりつつある。



写真2 校外学習の様子（コイの解剖）

2. 碧南海浜水族館で開催した「教員のための博物館の日」

当館の「教員のための博物館の日」への参加は、愛知県東三河地方で開催された蒲郡市生命の海科学館（平成23年）が最初で、その翌年に開催された豊橋市自然史博物館（平成24年）にもブースを出展している。当初は、出展することで参加する教員に向けて当館のPRになればという思いで参加していたが、さきに述べた当館の抱える“マンネリの打破”という課題に対する一つの改善策として、本事業は大きな力になると確信し自館での開催に踏み切った。なお、開催準備や進め方は、過去に開催している2館の先行事例が非常に参考になった。

【「教員のための博物館の日 in へきなん」開催概要】

- ①日時：2013年8月22日（木）9：30～16：00
- ②会場：碧南海浜水族館・碧南市臨海体育館（講演会会場）
- ③参加費：無料
- ④対象者：教員および教員を目指す大学生
- ⑤広報・周知：ホームページとチラシの配布
- ⑥予算：印刷費、会場設営費、旅費を含め約25万円
- ⑦プログラムの概要

午前の部：学校の先生向けの講演会

午前中に開催した教員向けの講演会は、当館が取り組んでいる博学連携の具体例の紹介、国立科学博物館から「学習資源としての博物館の利用方法について」、さらには国立科学博物館の名誉研究員の武田正倫博士による「『ヤドカリとイソギンチャク』誕生秘話」の3部構成とした。



当館が位置する西三河地方では、現在、小学4年生の国語の教科書（東京書籍）に「ヤドカリとイソギンチャク」という単元が収録されている。今回、その物語の作者である武田正倫博士に講演を依頼し「オーサービジット」が実現したことは本イベントの成功に欠かせない目玉企画となった。



写真3 午前部 講演会の様子

午後の部：サイエンスワークショップ

午後からは、近隣市町村の博物館・学習施設に協力を仰ぎ、各館で実践している学習プログラムや活動をブース形式で出展してもらい、教員の博物館活動への理解を促した。参加施設は、安城市歴史博物館、岡崎市東公園動物園、蒲都市生命の海科学館、高浜市やきもの里かわら美術館、豊田市自然観察の森、豊橋市



写真4 ワークショップ（岡崎市東公園動物園）

自然史博物館、半田空の科学館、碧南市藤井達吉現代美術館、国立科学博物館、碧南海浜水族館の10園館であった。出展されたブースは、理科を想定した化石発掘体験や貸し出し標本の紹介のほか、考古資料や鬼瓦、絵の具を使ったワークショップなどもあり、バリエーション豊かな“見本市”となった。

また、このワークショップは、教員だけではなく、一般来館者でも参加できるように配慮した。これにより、参加施設が教員以外の水族館来館者にも各施設をPRできる良い企画となった。



写真5 ワークショップ（豊橋市自然史博物館）



写真6 ワークショップ（高浜市かわら美術館）

⑧当日の参加者数と反応

参加者数は合計136名（他館のブース出展者30名は除く）であった。その内訳は小学

校 54 名、中学校 39 名、高等学校 9 名、大学 2 名、大学生 15 名、その他 17 名（碧南市、他市の教育委員会等）で小学校の教員が 40% を占めた。専門教科別に見ると理科の専門教員が（41%）と最も多く、次いで国語（11%）、社会（7.3%）の順であった。参加当日は、イベントについてのアンケートを実施したが、イベント自体の総合評価（4 段階）は「とても良かった」73%、「まあまあ良かった」27% と参加者の全員から高い評価を得ることができ、満足度の高いイベントを提供できたことが分かる。

また自由回答欄においても、

「非常に良い企画でした。1 回だけの企画にせず継続し発展できると良いと思います。」

「今回の行事を初めて知りました。若い教師も一緒に来ましたが、もっともっと多くの人に参加を呼びかければ良かったと思いました。」

「教科書に掲載されている『ヤドカリとイソギンチャク』について著者から直接話を聞いてよかった。」

などというポジティブな意見が多数寄せられ、参加した博物館と教員の双方にとって非常に有意義な一日となった。

3. 地方博物館から見た「教員のための博物館の日」について

「教員のための博物館の日」は、これまでに各地で開催された成果報告からも分かるように、開催者および参加者からの評価が非常に高い事業である。

その理由の一つが、事業を開催する博物館が自由にテーマや手法、規模を設定できる点にあると思われる。すでに取り組んでいる博物館を見わたしても“教員研修としての活用”に始まり、“博物館活動の P R”や“博学連携の強化”など思惑や活用方法は様々である。同じ名前の事業であっても、その地域の実情に即したプログラムに加工し、提供できる“自由度”こそが一番の魅力かもしれない。

また、地域の博物館同士の“ネットワークの構築”という面でも大いに貢献している。

地方博物館の多くは、地域に根ざした活動を展開しているため運営方針やスタイルに特徴を持った魅力的な施設が多い。複数の博物館がネットワークを構築するにあたっては、核となる施設（人物）の存在が必要である。しかし、小規模館同士の場合は連携の必要性を感じながらも調整等にかかる時間的、人的余力がないため、ネットワーク構築の第一歩からいきなり躓いてしまうことがある。そういった状況において本事業は、当館のように地方で連携を模索する発起人的施設の背中を押してくれる良いきっかけにもなっている。実際に、当館では今年度より本事業にも出展頂いた岡崎市東公園動物園と連携事業をスタートさせている。

このようにメリットづくしのように見える本事業にもいくつかの課題はある。まず、事業開設後、学校の利用率が上がっているかどうかである。本事業は始まってからすでに 5 年以上が経過しているが、その報告は開催事例が多く、開催後の学校利用・連携の改善等についての報

告がほとんど見当たらない。今後は、本事業の効果を計るような調査研究や取り組みも必要ではないだろうか。

また、事業自体の鮮度の維持についても気になるところである。本事業は、“教員”という極めてピンポイントな存在をターゲットにしている。そのため、地方開催では回を重ねるごとに参加者が毎年ほぼ同じ顔ぶれとなっていくことが予想される。当館で実施したアンケートの中にも毎年開催を望む教員の声も多かったが、同じような趣旨のイベントを連続開催することによるマンネリ化も地方博物館においては無視できない課題となってくると思われる。

これらの課題は、一つの博物館が単独で解決していけるものではないが、分野の壁を越えた様々な博物館が協力して地域単位で取り組むことで道は大きく開くかもしれない。

「教員のための博物館の日」はそろそろ次のステップとして、「地域とネットワーク」を合言葉に、長期的なビジョンのもと息の長い事業として取り組む時期に来ているのではないだろうか。

「教員のための博物館の日」の現状と 全国的なネットワークへの発展

国立科学博物館 岩崎誠司、小川義和、土屋実穂、渡邊千秋

1. 「教員のための博物館の日」の現状

東京・上野から始まった「教員のための博物館の日」は、2010年の旭川市での開催を皮切りに地域開催館を増やし、2013年度には日本各地の14地域で開催された。博物館にあまり関心のない教員や、博物館を授業に活用できる学習資源ととらえていない教員を主な対象としている。一方で開催形態に自由度を持たせたことより、地域の博物館で博学連携の課題を検討したり、共有したりする機会ともなっている。

2013年度は北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄の各地方で開催することができ、参加した教員は1,600名以上となり、博物館や大学、NPO等の出展団体は約100団体に上った。科学系博物館で理科の苦手意識のある教員を対象に始めた事業であるが、今年度は歴史系の館が会場となり、出展博物館も全て人文系という例もあった。また、運営方法についても、教員が自由に参加できるように事前予約不要とした地域、教育委員会と連携した教員研修を「教員のための博物館日」として実施する例など多様である。

「教員のための博物館の日」が全国的に認知されるようになり、各地の館から開催方法についての相談が増えてきている。各館や地域の異なる事情を聞く中で、本事業の主旨を再検討し、事業実施までの過程を「見える化」することが、今後全国的なネットワークとしてさらに発展

するために必要と考えている。

2. 「教員のための博物館の日」 がつないだもの・つながったもの

本事業ががつないだもの・つながったものは、①教員と博物館、②ネットワークの再構築、③地域と地域、である。①教員と博物館をつなぐことで、運営者である博物館側にとっても普段接することの少ない現場の教員から生の声を聞き、博物館職員が学校について改めて考えたり、既存の学習資源改善のヒントを得る機会となっている。②地域開催を単館で行うのではなく、近隣の博物館や大学、企業、NPO など多様な機関から出展者を募り、本事業で連携することにより、地域の課題を明確にしたり、共同で事業を行う契機となるなど、既存のネットワークの強化（再構築）が実現している。③国立科学博物館が本事業を各地域の博物館と共催してきたことにより、当館に特徴的な開催パターンや開催ノウハウが蓄積されつつある。館の規模や設立主体、既存の資源や博学連携の課題などにもバリエーションが見られる。このような先行事例情報の共有は、新規開催館にとって参考になるとともに、北海道での開催の様子を山陰地方から視察に訪れ、そこで地域を越えた交流が始まるなど、地域間での新たな連携の契機ともなっている。

3. 「教員のための博物館の日」の課題と 全国的なネットワークへと発展させるための方策

「教員のための博物館の日」の初期においては、理念の説明、運営ノウハウの紹介等を個別の館と事務局（国立科学博物館）との間で行ってきた。開催館、開催地域の増加に伴い、運営スタイルも多様になってきたため、「教員のための博物館の日」とは何かが不明瞭になってきたことも否めず、早急に共通理念について検討する必要がある。また、規模や課題の異なる各地区で行われた開催のノウハウを整理し、既開催館、新規開催希望館の参考となるよう報告書の形でまとめたり、開催希望館が開催を検討するために、開催条件やスケジュール等を明文化し、公開することが必要と考えている。

開催地域の増加に伴って蓄積された、各地域の事情やそれに対する工夫などを関係博物館で共有するために、2013年3月に地域開催を行っている館と2013年度の開催が決まっている館の担当者が集まって「教員のための博物館の日」担当者ミーティングを行った。他地区の運営方法や課題はそのまま自館の運営に活かすことができ、参加館からは大変好評であった。さらに地域を越えた教育担当職員間の交流も生まれた。

現在、既開催館に来年度の開催予定について照会中であり、新規開催希望館とも調整を進めているところである。「教員のための博物館の日」は従来の教員研修とは構成が異なるため、

本事業に関心のある館には、来年度開催館の日程や概要を参考に、開催館に足を運んでいただくことをお勧めしている。実際の開催の様子を確認いただくとともに、博物館間、地域間での交流のきっかけにいただければ、という思いからである。

「教員のための博物館の日」を契機に各地域で育まれた博物館のつながりは、共通の理念のもと地域同士のネットワークへと発展することが期待できる。このネットワークの充実・活発化が、学校と博物館のより良い関係を築くことに貢献していくと考えられる。さらに、全国に様々な博物館同士のネットワークが複層的に広がり、現場を担う博物館職員同士の関係が緊密になることで、博物館活動の展望が開けていくと考える。

参考資料

- 1) 小川義和, 「教員のための博物館の日」の取り組み, 博物館研究, 45 (11), 2010
- 2) 渡辺千秋・田中邦典・久保晃一・岩崎誠司・永山俊介・小川義和, 地域の教育機関をつなげる仕組み～教員のための博物館の日～, 全国科学博物館協議会, 2013.2.